ダイヤモンドは歌わない

蓮井　誠也

一　手織りの絨毯とノイズ

僕の仕事は、AIの文章に人間らしい傷をつけることだった。

午前二時十七分。モニターの中で、一人の男が恋人を亡くしていた。

〈彼は深い悲しみを感じ、彼女との幸福な記憶を思い出し、床に崩れ落ちて泣いた。〉

僕は三行を削った。

〈悲しいと説明しすぎている〉

三秒後、AIは書き直した。

〈玄関を開けたとき、彼は彼女の靴がないことに気づいた。分かっていたはずなのに、そこで初めて泣いた。〉

悪くなかった。むしろ僕が書くよりいい。それが少し腹立たしかった。

僕はヒューマナイザーと呼ばれる仕事をしていた。AIが生成した小説や脚本の矛盾を直し、正しすぎる感情を少し濁らせる。十二月に蝉が鳴けば消す。死んだ母親が電話をかけてくれば消す。悲しんでいる人間が悲しみについて正確に語りすぎていれば、意味のない仕草を一つ置く。

かつて僕は小説家だった。

二十四歳で新人賞を取り、最初の小説が馬鹿みたいに売れた。直木賞まで取った。若き天才、人間にしか書けない痛み、文学の未来。僕が黙れば寡黙な天才、失礼なことを言えば異端児、二日酔いなら創作に身を削る作家になった。

直木賞授賞式の夜、知らない人間に何十回も「次も期待しています」と言われた。

最初の小説を書くとき、失うものは何もなかった。

二作目には、失うものしかなかった。

その頃、生成AIが文芸賞の最終候補に残った。テレビで「脅威に感じますか」と聞かれ、僕は笑って答えた。

「小説は文章の上手さだけではないので」

家へ帰り、そのAIの小説を二度読んだ。

半年後、新しいモデルへ自分の二作目と同じ設定を与えた。十四秒で四万字が出た。

主人公が母親の葬儀から帰り、味噌汁を作る。冷蔵庫に母親が買った豆腐が残っている。腐りかけている。捨てる。ただそれだけの場面で、僕は泣いた。

機械に泣かされた。

机には僕が何か月もかけた原稿があった。急に全部、偽物に見えた。

書かなければ負けない。

書かなければ、才能がなくなった証明にはならない。

そうして四年、僕は昼間に自動車部品工場で窓枠の傷を見つけ、夜にAI小説の傷を直した。

人間が作った芸術には「Human Made」という認証がつく時代になっていた。機械なら均一に織れる絨毯を、わざわざ人の手で少し歪ませて高く売るようなものだった。

僕はそれを下品だと思っていた。

*

「久しぶりだな、天才」
高校時代の先輩、灰谷淳士に呼び出されたのは、そんな頃だった。
「やめてください」
「じゃあ元天才」
「もっと嫌です」
灰谷は出版社で記者をしていた。政治家の汚職、企業の不正、芸能人の不倫。娯楽をAIが作るようになっても、人間社会の醜聞だけは人間が書いた方がよく売れた。
「仕事頼みたい」
「嫌です」
「五万」
「聞きます」
端末には若い女の顔と値段が並んでいた。
「パパ活？」
「今はパーソナル・スポンサー・マッチングらしい」
夢を追いながら男から金をもらって暮らす若者について書け、と灰谷は言った。
僕が選んだ女のプロフィールには、こうあった。
〈夢を応援してくれる人と出会いたいです！〉
黒川理沙、二十六歳。職業、アーティスト。

数日後、待ち合わせ場所のファミレスに現れた黒川は写真より少し疲れて見えた。擦れたスニーカーを履き、水を飲むたびに氷を噛んだ。
「プロフィールに書いてあった夢って？」
「歌ってます。今は路上」
「この時代に？」
「この時代だから。AIばっかりだから、生身で歌えば目立つかなって」
「人、止まります？」
「全然」
彼女は笑った。
「じゃあ、やめれば」
「嫌です」
「なぜ」
「夢だから」
「努力は報われる？」
「報われます」
「報われなかった人は？」
「まだ途中だっただけ」
「途中で死んだら？」

「来世に持ち越し」
思わず笑った。
「僕、そういう綺麗事嫌いなんです」
「私は好きです」
「なぜ？」
「綺麗じゃない現実なんて、誰も教えてくれなくても勝手に来るから」
結局、記事は書けなかった。
何を書いても、黒川が「貧困女性」という記号になる気がした。

数週間後、工場が早く終わった夕方、公園で歌声を聞いた。
黒川だった。
下手だった。高音で声が裏返った。コードを間違えた。歌詞も、朝はいつか来るとか、涙には意味があるとか、僕が嫌いな言葉ばかりだった。
誰も止まらない。
僕だけが止まった。
理由は分からない。気づくと泣いていた。
黒川は僕に気づいても、最後まで歌った。
曲が終わり、僕は一人で拍手した。
彼女は、本当に嬉しそうに笑った。

幸福というものは、その最中には名前がついていない。
名前がつくのは、大抵なくなったあとだ。

二　不完全な共鳴

黒川が僕の家に住むことになった理由は、家賃だった。
「四万足りない」
「うち、一部屋余ってますよ」
「何目的？」
「歌」
「怖」
家賃の代わりに、気が向いたら歌う。それだけの約束だった。
荷物は段ボール四箱とギター二本。
「人間なんてこれくらいで生きられるから」
「ギター二本ありますけど」
「生命維持装置」
同居初日の午後十一時四十分から発声練習を始め、翌朝には管理会社から苦情が来た。
料理は壊滅的だった。

「これ何」
「親子丼」
「親は？」
「鶏」
「子は？」
「卵」
「どこ？」
「焦げた」
二人でカップ麺を食べた。

給料日前には千円だけ握って安い居酒屋へ行った。百二十円の焼き鳥と二百九十円のレモンサワーを前に、黒川は武道館へ行くと言った。
「無理でしょう」
「そこは行けるって言うところ」
「僕に何を期待してるんです」

黒川は帰宅すると僕のプリンを勝手に食べた。靴下を全部ハンガーに吊した。午前六時に歌った。僕にハモらせ、音を外した僕を見て笑いすぎて黒川も歌えなくなった。
恋人ではなかった。

少なくとも僕は、その名前をつけなかった。
ただ、夕飯を買うとき無意識に二人分を見るようになった。夜中に玄関が鳴ると安心した。洗面台の化粧水も、牛乳の減る速度も、生活の一部になった。

ある夜、黒川はパパ活の帰りにひどく疲れた顔で帰ってきた。僕は何も聞かず、冷蔵庫に残っていた缶ビールを一本渡した。
「今日の人、ずっと自分の会社の話してた」
「興味ないんですか」
「ないよ」
「なら言えばいいのに」
「お金もらってるから聞くの」
黒川は缶を開けた。
「白石さんも似たようなもんでしょ」
「僕？」
「興味ない文章直して、お金もらってる」
何も言えなかった。
「私たち、結構ちゃんと働いてるね」
黒川が笑ったので、僕も笑った。

晴れた休日、黒川は必ず言った。
「布団干した方がいいですよ」
「面倒です」
「絶対気持ちいいから」
「夜には同じでしょう」
「そういう問題じゃない」
「何の問題」
「気持ち」
「一番信用できないやつですね」
結局、二人でベランダへ運んだ。
夕方、取り込んだ布団に黒川が顔を埋める。
「お日様の匂い」
「ダニの死骸の匂いらしいですよ」
枕が飛んできた。
ただの土曜日だった。

その頃、僕はまだヒューマナイザーを続けていた。
ある夜、黒川が画面を覗いた。
「AIが書いたのを白石さんが直すんでしょ。じゃあ共同執筆じゃん」

「違います。僕は何も作ってない」
「歌だって、人が作った曲を歌って自分の歌になるよ」
「それは歌手でしょう」
「じゃあ文章の歌手」
「最悪ですね」
黒川は笑い、それから言った。
「白石さんが一から書いた方が面白そう」
「書きません」
「怖いんだ。AIよりつまんなくて、自分が天才じゃなかったって分かるのが」
図星だった。
「歌が売れてから言ってくださいよ」
黒川の笑顔が消えた。
翌朝、机に缶コーヒーが置いてあった。
〈昨日は言いすぎた。ごめん〉
僕は裏に、〈僕も〉と書いた。
それで終わった。
数日後、黒川が歌う横で、僕は久しぶりに一行を書いた。
〈春は死体の匂いがする。〉
「暗っ」

黒川が笑った。
締切も読者もいなかった。彼女が歌い、僕が書く。ただそれだけだった。
その無駄だけは、まだ僕たちのものだった。

*

最初にAIへ曲を書かせた夜を、黒川理沙は忘れなかった。
オーディションでほとんど最下位になった帰り、端末へ広告が出た。
〈あなたらしさを、あなた以上に。〉
一曲だけ。
勉強のため。
そう自分に言い聞かせ、過去の歌、日記、SNS、好きな曲、そして公園で白石が一人だけ拍手した映像まで読み込ませた。
〈黒川理沙という表現者を解析しています〉
十年が五分で解析された。
生成された曲を聴き、彼女は泣いた。
自分だった。
自分ではなかった。
自分が一生かけても書けないほど、自分らしい歌だった。

翌日、白石の前で歌った。
「今までで一番好きかもしれない」
その一言が、嬉しくて、死にたくなるほど苦しかった。
その夜、二曲目を作った。
一曲だけだった。
二曲目は勉強。
三曲目は自分で直すため。
四曲目はライブが迫っていたから。
やがて理由を考えなくなった。
AIの曲は売れた。
動画が一万回、十万回、百万回と再生された。客が増え、マネージャーがついた。スタッフが増えた。嘘を告白すれば、もう自分一人が傷つくだけでは済まなくなった。
〈もっと私っぽく〉
〈歌詞が綺麗すぎる〉
〈私はこんな難しい言葉を使わない〉
AIは彼女の修正癖まで学習し、最後には直す場所がなくなった。
ファンは言った。
「理沙ちゃんの泥臭い歌に救われました」
彼女は笑い、トイレで吐いた。

マネージャーに「最近、曲が完璧すぎない？」と言われた夜、AIへ入力した。

〈人間が作ったようにしてください〉

〈定量化できません〉

〈少し間違えて〉

AIは少し弱い比喩と、不自然なコードを一つ入れた。

その曲が一番売れた。

〈この不完全さが刺さる〉

〈生身の歌だ〉

〈理沙にしか書けない〉

とうとう彼女は、人間らしさまで機械につくらせた。

＊

その頃、僕はヒューマナイザーを辞めた。

「理沙見てると、AIがどうとかくだらなくなったんですよ」

僕は自分のノートを開いた。

「下手でも書けばいいって言ったでしょう。だから書きます」

黒川は笑った。

その夜、風呂で声を殺して泣いたことを、僕は知らなかった。

三　ダイヤモンドの心臓

灰谷がダイヤモンド計画を知ったのは、その頃だった。
アステリオン・ライフの研究員真壁から渡された資料には、七人の被験者がいた。
病気で指が動かなくなったピアニストは、〈両手が自由に動き、満員のホールで演奏を続ける人生〉を選んだ。
八十六歳の女は、〈亡くなった夫がまだ生きている昭和六十年の自宅〉を選んだ。
被験者の意識は望んだ夢へ移され、不要になった身体は医療資源になる。ただ心臓だけは人工ダイヤモンドの中に残される。拍動が続く間、それが本人の意識と現実を結ぶ生体核になるという。
「自殺だろ」
灰谷が言った。
「会社は移住と呼んでいます」
真壁は記事にしてくれと頼んだ。
灰谷は、すぐには書かなかった。
証拠が足りない。裏取りが必要。全部本当だった。
もう一つ理由があった。
七人では弱い。
有名人が一人いれば、一面になる。

他人の不幸を嫌悪しながら、それが記事になる大きさまで育つのを待つ。それが記者としての灰谷の業だった。

灰谷は資料を白石にも見せた。
最後のページには匿名アクセスコードがあった。
灰谷は切り取ろうとして、やめた。
もし白石が興味を持てば、内部から記事が取れるかもしれない。
ほんの一瞬、そう思った。

僕は資料を持ち帰り、机へ放置した。
「死んで好きな夢を永遠に見るらしいです」
僕が言うと、黒川は笑った。
「最高じゃん」
「死んでますけど」
僕は資料の上にノートを置いた。
あとになって何度も考えた。
引き出しに入れていれば。
捨てていれば。
持ち帰らなければ。

人は取り返しのつかないことが起きたあと、存在しなかった分岐点をいくらでも発見する。

＊

黒川は二十九歳になり、三百人のライブハウスを満員にした。
終演後、彼女は聞いた。
「昔の私と今の私、どっちが好き？」
「同じ人でしょう」
僕は答えた。
黒川は笑った。
「そっか」
それが正しかったのか、今も分からない。

＊

数日後、私は机の資料を開いた。
作曲AIの会社とダイヤモンド計画の会社が、同じアステリオンの系列だと知った。
その夜も私は満員の客の前でAIの歌を歌った。
客は泣いた。

私は、その歌が〈二十代後半女性の共感値を重視〉〈サビで限定的な救済〉という命令から生まれたことを知っていた。
昔、この景色のためなら死んでもいいと思った。
今は、本当に死んだ方が楽かもしれないと思った。

帰宅すると白石はソファで眠っていた。
机には未完成の小説があった。
汚い字。消した跡。〈うまくまとめるな〉というメモ。
AIなら一秒で直せる文章を、白石は何日もかけて書いていた。
私は気がついたら泣いていた。
白石を小説へ戻した自分が、自分の歌から逃げている。

その夜、匿名コードを入力した。
〈あなたが望む世界を教えてください〉
〈歌手になりたい〉
消した。
〈武道館に立ちたい〉
消した。
〈自分の曲で成功したい〉

消した。
どれも違った。
システムが質問を変えた。
〈あなたが最も幸福だった瞬間を教えてください〉
思い出したのは、満員の会場ではなかった。
夕方の公園。
下手な歌。
誰も止まらない道。
たった一人の拍手。
彼女は入力した。
〈誰か一人が、私の歌を最後まで聴いてくれる世界〉
そこで初めて分かった。
夢は、もう叶っていた。

*

遺書を書こうとした。
〈ごめんなさい〉
違う。

〈ありがとう〉
軽い。
〈好きでした〉
卑怯だった。
AIが続きを提案した。
〈あなたと過ごした日々は、私にとってかけがえのない宝物でした。〉
「黙って」
電源を切った。
白い紙とペンを出した。
最後くらい、自分の言葉で書きたかった。
何も出なかった。
だから、白紙のまま置いた。

*

翌朝、黒川は歌わなかった。
「今日ライブでしょう」
「夜から」
「大丈夫ですよ」

黒川が僕を見た。
「変わったね。白石さんが大丈夫とか言うようになった」
「あなたに毒されたんでしょう。努力は報われるんですよね」
「うん」
彼女は笑った。
一瞬だけ泣きそうに見えた。
僕は見なかったことにした。

十二時間、工場で窓枠を検査した。
帰りに黒川の好きなプリンを買った。
重い玄関を開ける。
「ただいま」
返事がない。
ソファの上には二つのものがあった。
一枚の白紙。
そして、透明なダイヤモンド。
中で小さな心臓が脈打っていた。
「理沙？」
一拍。

「何してんの」
一拍。
「今日ライブでしょう」
一拍。
紙を裏返した。
何もない。
「遺書くらい書けよ」
笑った。
「歌詞ばっか書いてるんだから」
翌朝から、世界は黒川理沙の選択を祝福し始めた。
〈夢を追い続けた歌姫、永遠のステージへ〉
誰も「死んだ」とは書かなかった。
僕も、ダイヤモンドの中で心臓が動く限り、それを死と呼べなかった。
だから僕は、彼女が死んだ日のことを書こうと思った。

四　朝はいつかくる

〈彼女は死んだ。けれど僕は、それを知らなかった。〉
最初の一文から、止まらなくなった。

工場を辞めた。
眠らず、食べず、白紙の遺書を机の横に置いて書いた。
なぜ死んだのか。
何に苦しんだのか。
僕に何を言いたかったのか。
何も分からない。
だから何十万文字も書いた。

その頃、灰谷はアステリオンを追っていた。
黒川の作曲AIはアステリオン系列だった。利用者の生成指示から、自己否定、承認欲求、現実逃避、創作への絶望を分析し、ダイヤモンド計画の候補者抽出に利用していた疑いが出た。
灰谷が僕の家へ来た。
「黒川さん、向こうから見つけられてた可能性がある」
僕は帰れと言った。
灰谷は続けた。
「資料の匿名コード、俺は知ってた。切ろうと思って、残した」
僕は殴った。
「お前が殺した」
「そうだ」

灰谷は血を拭いながら言った。
「でも、お前も知らなかった」
「黙れ」
「俺は事件を見た。会社は顧客を見た。ファンは歌姫を見た。お前は夢を叶えていく女を見た」
「黙れ！」
「黒川理沙本人を、一体誰が見てたんだよ」
殴れなかった。

その夜、黒川の端末を初めて開いた。
〈もっと私っぽく〉
〈少し間違えて〉
〈人間が書いたように〉
そして何度も、
〈白石さんが好きそうな感じに〉
僕が好きだと言った曲は、僕のために機械が作ったものだった。
最後の方に質問があった。
〈私は本当に才能がありますか〉
〈才能という概念に客観的定義はありません。ただし、黒川理沙氏の活動には高い市場価値が認められます。〉

〈そういうことじゃない〉
それが最後だった。

*

数年後の夏の日、灰谷の力添えもあり僕の小説は無事に出版された。
その小説は売れた。
元天才作家、奇跡の復活。
AIには書けない喪失。
賞を取った。映画になった。金が入った。時計を買った。高い部屋へ移った。
「先生の作品に救われました」
何度も言われた。
黒川のダイヤモンドは書斎に飾られ、取材では「創作の原点」と呼ばれた。
白紙の遺書だけは、引き出しに残した。
最初は、その白さこそ黒川だと思っていた。
何を書いても、僕には分からない部分。
けれど小説が売れるほど、白紙を見るのが苦しくなった。
読者は言った。
「理沙さんの気持ちが分かりました」

「先生だから書けたんですね」
僕も、いつしか否定しなくなった。
そして白紙を見る。
何も書かれていない。
何百万部売っても、お前は彼女の最後の言葉を知らない。
そう言われているようだった。

ある日、取材撮影の前に部屋を片づけた。
白紙を手に取った。
もういいだろう、と思った。
僕は書いた。
整理がついた。
前へ進んだ。
そう自分に説明した。
本当は、答えがないことに耐えられなかった。
白紙がある限り、黒川は僕の小説の外に居続ける。
だから捨てた。
「もういいよな」
返事はなかった。

紙はゴミ箱へ落ちた。

＊

数週間後、灰谷と高い店で食事をした。
「過去になってよかったな」
灰谷が言った。
「最近のお前、幸せそうだよ」
僕は店を見た。
金。
名声。
次作を待つ読者。
黒川はいない。
「ああ」
声が出た。
「こんなものが幸せだったんだ」
店を飛び出した。
家へ帰り、白紙を探した。
ない。

そこで思い出した。
僕が捨てた。
間違えてではない。
自分で、いらないと決めた。
僕は黒川がダイヤモンドになった夜より激しく泣いた。

＊

書斎のダイヤモンドを持ち上げた。
「理沙」
淡く光った。
「僕、売れたよ」
一拍。
「賞も取った」
一拍。
「幸せらしいです」
一拍。
「夢、叶った」
一拍。

「努力って報われるんですね」
一拍。
「だから何なんだよ」
光が弱くなった。
台座を見る。
生体維持率、0.7%。
アステリオンへ接続した。
〈生体核の想定維持期間を超過しています〉
「助けて」
〈対応できません〉
「金ならある」
〈対応できません〉
「僕の心臓使えよ」
〈適合しません〉
「じゃあどうすればいいんだ！」
端末を壁へ投げた。
ダイヤモンドだけが弱く光っている。
「ごめん」
一拍。

「何にも知らなかった」
一拍。
「一緒にいたのに」
一拍。
「僕さ、本当は理沙の歌が好きだったわけじゃないのかもしれない」
一拍。
「下手だったから好きだった」
一拍。
「声が裏返って、コード間違えて、朝は来るとか、努力は報われるとか、馬鹿みたいなこと本気で言うから」
一拍。
「歌じゃなくて、理沙が歌ってるっていうことが好きだった」
一拍。
「言えばよかった」
沈黙。
「理沙？」
最後に一度だけ光った。
「待って」
次の拍動は来なかった。

「遺書、捨てちゃったんだよ」
光が消えていく。
「だから、もう一回くれよ」
声が出なかった。
「今度は捨てないから」
ダイヤモンドは、ただの透明な石になった。
僕はそれを抱きしめた。
硬く、冷たく、角が胸に食い込んだ。
公園を思い出した。
誰も止まらなかった。
黒川は下手だった。
僕だけが最後まで聞いた。
本当は、それだけでよかった。
二百九十円のレモンサワー。
焦げた親子丼。
午前六時の発声練習。
プリン。
洗濯物。
「ただいま」

「おかえり」
そんな一日が終わり、また似たような一日が来る。
あれを幸福と呼ぶのだと、僕は全部なくしたあとで知った。
朝が来た。
黒川はよく歌っていた。
どれだけ長い夜にも、いつか朝は来る。
僕はその言葉が嫌いだった。
朝が来ても、死んだ人は戻らない。
何も解決しない。
それでも朝は来た。
彼女の言った通りだった。
カーテンを開けた。
寝室の布団を見た。
「今日、布団干した方がいいですよ」
声を思い出す。
外はよく晴れていた。
風もなかった。
今日は、布団を干そうと思った。

＊

昼過ぎ、白石から電話が来た。
「理沙が死にました。今度こそ、本当に」
俺は「そうか」としか言えなかった。
「朝まで抱いてました。それで、布団干しました。晴れてたから」
電話が切れたあと、俺は古いダイヤモンド計画の資料を開いた。
見覚えのない紙が一枚挟まっていた。
〈DIAMOND PROJECT／第二段階実験概要〉
〈生成環境内部に同一の技術体系を再構築する〉
〈生成環境内の人格がダイヤモンド化した場合、さらに下位の生成環境へ意識連続性を移行できるか検証する〉
〈理論上、生成環境内部の人格は、自身が基底現実に存在するのか判別できない〉
〈階層数に技術的上限は確認されていない〉
真壁へ電話した。
番号は使われていなかった。
もし、この世界も誰かの夢なら。
俺の罪は偽物になるのだろうか。
ならない、とすぐ思った。

俺は痛かった。
白石も痛かった。
黒川も、きっと痛かった。
逆も同じだ。
白石が公園で聞いた歌も、安い居酒屋も、布団も、生成された記憶なら偽物になるのだろうか。
分からなかった。
ただ、どこかの階層では黒川がまだ歌い、白石が一人で聞いているかもしれない。
救いではない。
ただの現実逃避だ。
それでも、一瞬だけ胸が軽くなった。
端末が鳴った。
差出人のない通知。
〈あなたが最も幸福だった瞬間を教えてください〉
高校時代の文芸部室を思い出した。
まだ天才ではなかった白石。
まだ記者ではなかった俺。
「先輩、これ読んでくださいよ」
「嫌だよ。長いだろ」
「三ページです」

「じゃあ読む」
ただ放課後があった。
以前にも、まったく同じ質問へ答えたことがあるような気がした。
窓の外では人が歩き、車が走り、風が吹いていた。
何もおかしくない。
何一つ。
画面の中では、カーソルだけが一定の間隔で、静かに明滅していた。

［作者あとがき］

この物語を書こうと思ったきっかけには、ある人との関係がありました。その人は以前、「縁があればまた会える」と言いました。僕は、その言葉を今でもうまく信じられません。縁というものが本当にあるのかも分からないし、離れてしまった人と、いつかまた同じ場所で笑える保証なんてどこにもありません。それでも人は、「またいつか」という言葉を完全には捨てきれないのだと思います。

この物語で描きたかったのは、AIそのものへの恐怖ではありません。AIがどれほど賢くなっても、それを使うのは人間です。人間は便利なものを使いながら、少しずつ面倒なことを手放していきます。

考えること。迷うこと。失敗すること。自分の言葉を探すこと。

それらはどれも苦しくて、時間がかかって、効率が悪い。だから、代わりにやってくれるものが現れれば、きっと僕たちは喜んで任せてしまう。けれど、人間らしさというものは、案外そういう無駄の中にあるのではないかと思っています。

声が裏返ること。コードを間違えること。何時間考えても一行しか書けないこと。言いたいことがあるのに、うまく言葉にできないこと。

完璧ではないからこそ、そこにその人がいる。

理沙が失っていったのは、歌を作る能力だけではありません。自分で迷い、自分で間違え、自分で選んだと言える感覚そのものだったのだと思います。一方で白石も、理沙とは違う形で同じものを失っていきます。AIに負けることを恐れて小説から逃げ、ようやく戻ってきたと思ったら、今度は理沙の死を作品にすることで成功する。灰谷も同じです。人の不幸を告発しようとしながら、その不幸が大きな事件になることを心のどこかで待っている。この物語には、完全な悪人を置きたくありませんでした。誰か一人が悪かった

から悲劇になったのではなく、それぞれがその瞬間では理解できる選択を少しずつ積み重ねた結果、気づいたときには取り返しのつかない場所まで来てしまった。たぶん現実の後悔も、そういうものだと思います。人生を壊すほど大きな間違いを、一度だけするわけではない。

あのとき話を聞けばよかった。あの一言を言わなければよかった。あと五分だけ一緒にいればよかった。ちゃんと顔を見ればよかった。

そういう小さな分岐を、あとになって何度も拾い集める。でも、そのときの自分には未来が見えていない。だからこの物語では、「気づくことが遅すぎる」という残酷さを大切にしました。白石が理沙を愛していたことに気づくのも遅い。理沙が本当に欲しかったものに気づくのも遅い。白石が自分にとって何が幸福だったのかを理解するのも、すべてを手に入れたあとです。僕は、幸福というものは、幸福である最中には案外分からないのではないかと思っています。特別な旅行でも、大きな成功でも、劇的な告白でもない。

牛乳が少しだけ残っていること。誰かの生活音が聞こえること。冷蔵庫のプリンを勝手に食べられること。くだらない映画を観て笑うこと。晴れた日に布団を干すこと。

そんなものを、人はその瞬間には幸福とは呼びません。ただの日常だからです。でも、その「ただの日常」が二度と戻らなくなったとき、初めて自分が何を持っていたのかを知る。だから最後に白石を救うものを、大きな希望にはしたくありませんでした。理沙が奇跡的に帰ってくるわけでもない。白石が悲しみを克服するわけでもない。人生の意味を悟るわけでもない。ただ朝が来る。そして、「今日は、布団を干そうと思った。」それだけです。僕はこの一文を、前向きな言葉だとは思っていません。生きる希望ですらないかもしれない。悲しいままでも朝は来る。後悔したままでも腹は減る。大切な人がいなくても、洗濯物は溜まる。人間は、そういう残酷な日常の中で生きていかなければならない。でも同時に、その何でもない行為の中に、

いなくなった人が残ることもある。白石が布団を干すとき、そこにはもう理沙はいません。けれど理沙がいた日々は、白石の行動の中に残っている。人は消えても、その人によって少しだけ変えられた自分は残る。それを僕は、ひとつの愛の形だと思っています。

そして最後に、世界そのものがダイヤモンド計画の中なのかもしれない、という可能性を残しました。もし僕たちの世界が偽物だったら、そこで感じた悲しみも偽物なのでしょうか。もし理沙も白石も灰谷も、誰かの理想世界の中に作られた存在だったら、彼らが愛したことには意味がないのでしょうか。僕には分かりません。ただ、本物か偽物かということよりも、「その人にとって本当にそう感じられた」という事実の方が、人間にとっては重要なのではないかと思います。夢の中で泣けば、涙は本物です。存在しない人を愛したとしても、その愛で人生が変わったなら、それを簡単に偽物とは呼べない。だからこの物語は、AI についての物語であると同時に、現実についての物語でもあり、愛についての物語でもあります。今日が駄目でも、明日がある。でも明日は、やって来た瞬間に今日になります。そう考えれば、僕たちが待ち続けている「明日」という日は、永遠にやって来ないのかもしれません。それでも人は明日を信じる。縁があればまた会えると信じる。朝はいつか来ると歌う。根拠なんて何もなくても。僕は、そういう人間の愚かさを嫌いになれません。むしろ、それこそが人間の美しさなのだと思います。失ってしまった日常も。まだ手元に残っている日常も。二度と会えないかもしれない人も。いつかまた会えるかもしれない人も。来るかどうか分からない明日も。全部、なくしてから愛するのではなく、できることなら、まだそこにあるうちに愛してほしい。そんな思いを込めて、この物語を書きました。一言のつもりが長く語ってしまいました笑。

最後になりますが、この場をお借りして企画に携わっていただいた方々に最大限の感謝を申し上げます。

ありがとうございます。

蓮井誠也さん（当時のペンネーム：がんばるするがちゃん）の過去の応募作品『スクリーンの向こう側で』は以下の二次元コードから読むことができます。

ダイヤモンドは歌わない

2026年10月24日　発行

著者　蓮井　誠也

令和8年度 函南町立図書館8月～11月ＹＡ展示・企画冊子
編集・発行　函南町教育委員会教育部生涯学習課（函南町立図書館）
電話番号　055-979-8700
住所　419-0122　静岡県田方郡函南町上沢107番地の1

当作品について転載・複製・複写・翻訳を著作者の許可なしに行うことを固く禁じます。（著作権法上での例外を除く。）また、個人や家庭内の利用であっても、代行業者等の第三者に依頼して無断でスキャン及びデジタル化することはできません。作品の著作権は著作者に帰属しますが、函南町立図書館は作品を永続的に無償で使えるものとします（主に公開にあたっての編集、印刷、配布、掲載に関すること）。ただし、当館は著作者の創作性を重視し、作品内容には関与しないものとします。また、すべての文章は原文のままとし、当館で校正・校閲作業は行っておりません。

AIが創作を支配する近未来。元天才作家・白石は、売れない歌手の理沙と暮らし再び書き始める。だが理沙はAIに依存し、理想の世界へ意識を移すダイヤモンド計画を選ぶ。白紙の遺書が彼に幸福を問い直す。

